

Title	非行少年の家族画の研究：相互作用性に着目した技法理解とその活用
Author(s)	藤掛, 明
Citation	2010 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3801
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2010年度

博士論文要旨
(指導教員 郡司篤晃教授 平山正実教授)

非行少年の家族画の研究

相互作用性に着目した技法理解とその活用

藤掛 明

(博士論文要旨) 非行少年の家族画の研究

～相互作用性に着目した技法理解とその活用

I 本論文の目的

本論文は、心理テストのひとつである家族画テストについて取り上げ、伝統的なテストとしての使用にとどめず、相互作用性の観点から検討し、家族画の新たな技法理解と活用のあり方を明らかにすることを目的とした。

具体的には、以下の7点について明らかにするものとした。

1. 非行少年の家族画テストの基礎研究として、基本的な解釈類型を提示する。
2. 非行少年の家族画テストを査定・診断的に用いる際に、相互作用性に着目すると、どのような実施方法が可能になるのか、その実施方法の体系を提示する。
3. 非行少年の家族画テストを治療的に用いる際に、相互作用性に着目すると、どのような描画の治療的な取り扱いが可能となるのか、その実施方法について提示する。
4. 相互作用性を有効に活用する際の基盤として、非行臨床特有の、また非行描画臨床特有の査定・診断上および治療上の原理について論じ、そのモデルを提示する。
5. 非行少年の家族画テストを、他の関連テストと比較し、どのような特徴があるのかについて考察する。
6. 国際的な比較として、タイ王国および大韓民国の非行少年の家族画と日本の非行少年の家族画とを比較し、各国の家族画の特徴、とりわけ日本の非行少年の家族画の特徴について考察する。
7. 家族画テスト技術の習得方法や解釈方法について、その実態を明らかにし、学習者に資する視座を提供する。

II 本論文の方法

本論文では、すでに発表した論文10を提示し(別添論文)、それらを、相互作用性に着目した技法理解と活用という観点から考察する方法を採用した。

別添論文は以下の通りである。

①別添論文1：「非行少年の家族認知の分析 ―質問紙及び描画法による類型化とその臨床像の検討」(1990)

②別添論文2：「描画臨床における相互作用性と治療」(2002)

- ③別添論文 3 : 「非行臨床における家族画の活用」 (2001)
- ④別添論文 4 : 「家族画における介入的アプローチ – 1 枚の家族画を前にして、次に何をするのか」 (1995)
- ⑤別添論文 5 : 「非行少年の家族関係をめぐって – ソンディ法と描画法による取り組み」 (1990)
- ⑥別添論文 6 : 「コラージュ法」 (2002)
- ⑦別添論文 7 : 「タイ王国少年院在院者の家族認知について – 家族画による類型化とその臨床像の検討」 (1992)
- ⑧別添論文 8 : 「大韓民国少年施設被収容者の家族画について」 (1993)
- ⑨別添論文 9 : 「描画テストの技術習得にまつわる初学者の態度について – 描画講義における質疑内容のパターン分析」 (1996)
- ⑩別添論文 10 : 「描画解釈における着眼点のパターン分析」 (1996)

III 全体の考察

全体の考察として、過去の論文で提示した事例と統計分析を基に、相互作用性の観点から、家族画技法の理解と活用について検討した。言葉を換えれば、家族画技法は、本来、査定・診断的な目的から固定的に実施することが通例であるが、刻々と変化していく臨床場面において、相互作用性を最大限に活用することで、いかにダイナミックに査定・診断的に活用できるのか、そしていかに治療的に活用できるのかということを検討したものである。

1. 家族画技法の理解 ～解釈の視点

家族画の基礎的な研究として類型を提示した。類型の意味づけにあたっては、その典型事例の検討などを加え、治療的な観点による類型とした。

2. 査定・診断的場面での相互作用性に着目した活用

査定・診断的場面において、家族画の相互作用性を考える場合、従来は描画後に質問もしくは話し合いを行い、それによって描画解釈情報を多く収集することをさしていた。本論文では描画実施事例の検討を中心に、それは「描画教示の選択や変形」にまで及ぶことを示した。すなわち、相互作用性を最大限に活用した場合、あらかじめ面接者として、どのような教示（描画種目）を描き手に与えるのか、あるいはどのような変法にして与えるのかを、面接の狙いや流れと、対象者（描き手）の関心や個性に即して決めていくことが

大切なことであると考えた。また、そうした教示の選択や変法を行う際に、恣意的で、的はずれにならないよう留意するためのスペクトラムを提示した。

3. 治療場面での相互作用性に着目した活用

従来、家族画の治療場面では、描き手のイメージの自律性を重視し、傍らで鑑賞者であることを旨とすることが奨励され、面接者は描き手のイメージに干渉せず、描き手の内なる成長を期待することが求められていた。本論文では、治療事例の検討により、相互作用性を最大限に活用するために、面接者から治療的な介入を行う方法があることを示した。これは、面接者が、描き直しや並べ替えなどの描画行為を再度指示することで、描き手の新たな描画体験を導くものであるが、大きく3つの方法に分類し、各特徴を考察した。

4. 非行臨床の独自性と治療戦略

非行臨床の独自性、および非行の描画臨床の独自性を考察した。これらは、査定・診断および治療双方の基盤となるものであり、相互作用性という柔軟で多彩な営みにあって、家族画の治療的戦略の方向性を得るためには非常に重要な事柄であると考えた。

5. 家族画技法の道具としての有用性

家族画を実施するにあたって、相互作用性を積極的に活用していくあり方を明らかにすることが本論文の目的であるが、同時に技法として共有されていくためには、そこに客観的、普遍的な要素を確保せねばならない。相互作用性を最大限に活用するためには、面接者が、恣意的で自己満足的な使用に陥らぬよう、技法としての客観的な有用性を確認することが不可欠であると考えた。ここでは(1)他のテストとの比較において、テストとしての独自の特徴があること、(2)文化・民族性の異なる外国との比較において、テストとしての普遍性があること、(3)解釈技術の習得において、また実際の解釈方法において、テストとしての定則性があることをそれぞれ明らかにした。

IV 結論

本論文では、非行少年の家族画について、相互作用性に着目することによって、従来取り上げられてこなかった視点や体系を導き出した。

藤掛 明